

— 東海大学インカレ初優勝 —
陸川 章ヘッドコーチの指導は

大変失礼な話であるが、数年前までは東海大学といってもバスケット界ではあまりピンとこない、関東大学リーグでも2部以下のチームであった。

平成12年その東海大学に日体大OBの陸川氏がバスケットボール部のコーチとして招聘された。それから5年、東海大学は居並ぶ古豪チームをなぎ倒し、平成17年ついに学生界の王者に輝いた。電車の中の東海大学吊り広告にも「バスケットボール部優勝」の文字が光る。

今回湘南の平塚市にある広大なキャンパスに陸川氏を尋ねて、その指導方法などを聞いてみた。



陸川章氏

りくかわあきら

昭和37年新潟県生まれ
新井高校から日体大へ進みセンターとして活躍。
卒業後NKKに所属、センターフォワードで日本代表選手としても注目を浴びた。
NKKが廃部となってから2年間仕事に専念した後、アメリカカリフォルニア州立ロサンゼルス校に留学してコーチ学を研究。
平成12年(2000)から東海大学ヘッドコーチ。

—— このたびはインカレ優勝おめでとうございます。初優勝という快挙でしたがいつごろから手ごたえを感じられたのでしょうか。

私としては2005シーズンが勝負の年と思ってやってきました。というのは竹内君をはじめとする主力選手が3年生になって成熟期を迎える中、春の関東大学トーナメント戦で竹内選手が全日本の合宿や東アジア大会出場で欠場だったにもかかわらず、準決勝で日本大学に善戦したときに感じたことです。竹内選手がいないことによって、リバウンドなど自分のチームの弱点が良く見えてきたことと、残った選手がその弱点を克服しようと努力したことなどがひとつの要因だと思います。

夏の合宿のときは竹内選手が全日本代表チームの強化で、また石崎選手がユニバーに行って留守だったこともあり、若手をコンバートしながらJBLの三菱さん松下さんにお世話になり、選手層を厚くしていきました。勝ち負けでいえば到底勝てる相手ではありませんでしたが、いいところまで接戦できたときもあり、その結果が選手の自信につながり秋のリーグ戦ではこれまでにない好成績を収めることができました。

—— 秋のリーグ戦では青山学院大に次いで準優勝でしたね。

いやあ、初戦の専修大に負けたのが大きかったですね。竹内選手が全日本の活動で第3週まで不在だったので、残りの選手をまとめて戦いましたが力及ばずでした。青山学院大と対戦する週になったとき、相手が全勝でくるとは思っていませんでした。確かに青山学院大は強いチームでしたが、リーグ戦は長丁場でもあり全勝することは難しく、2敗が優勝ラインの分かれ目と予測していたことについては、少し考えが甘かったようです。

東海大の今までの実績からすれば1部準優勝は初

めてのことだったので、喜んで良かったはずなのに、優勝できなかったことが選手たちの発奮材料となりました。その結果、私をはじめとしてその後の大会（インカレ）への自信とやる気と集中力につながったのは良かったですね。

—— 大黒柱の竹内譲次選手が全日本の活動などでチームに合流する時期が遅くなりがちなのも苦労するところでしょうか。

その辺は割り切っているつもりです。竹内選手が不在でも同じように戦える選手を育てることによって、チームはさらに強化されますし、彼が途中から合流してもチームワークが崩れることなく戦えるチームにならないといけません。幸い竹内選手はチームにフィットする時間が非常に短くてすむ、順応性が良い選手なので助かっていますが、全日本の活動からチームへ帰ったときの疲労度はかなりのものがあります。

彼は全日本ではフォワードポジションで、チームへ帰ればセンターという切替が必要ですが、私は国際的に通用するためには3ポイントが打ててドライブインもできるようなオールラウンド的な選手にならなければいけないと指導しています。

—— 東海大の指導者になって5年で日本一まで引き上げた実績は大いに評価されてしかるべきと考えますが、ここまでは順調でしたか？

私が就任した時は関東で3部から2部へ昇格したときで、小型のチームながら2部12チーム中5位につけるといふ頑張りを見せました。翌年から2部チームにも拘わらず優秀な素材の選手が入ってきてくれるようになり、それらの選手とそれまでの上級生とがうまく融合してくれてチームに力がつきました。

2002年の春、関東でベスト4に勝ち残ったとき、これはいけそうだと秋のシーズンに臨みましたが徹底的に叩かれました。振り返るとこれが非常に良い経験と転機になった最初で、多くの失敗や苦い経験がそれからの糧になったことは事実です。

良い素材の選手が加わったからといってそう簡単に勝たしてはもらえず、そこからが本当の意味でのスタートになりました。

関東の新人戦で2年続けて決勝で逆転負けを喫したり、1部との入れ替え戦で法政大に負けて1部に昇格できなかったときの挫折感はかなりのものでありましたが、その挫折感を選手も私もスタッフも共有できたことが良かったのかも知れません。

試合ともなれば勝つに越したことはありませんが、負けることによって得るものも大きいと思うのです。負けた場合は必ずその理由がありますので、反省し対策を考え、悔しさを克服するために更に努力する姿勢が生まれます。

私はどちらかという後ろ向きな反省よりも前向きな挑戦の方を好む性格ですので、失敗を次へのモチベーションに切り替えようと……。そのことが選手にとっても私にとってもいい刺激となり、チーム全体の改革と練習や試合に臨む体制の変化を引き出すことができました。

—— 選手たちの融合や練習に取り組む姿勢など、体制の変化について陸川さんが気にかけていたことはどんな点でしょうか

私はいつも選手たちの中心に位置するように心がけています。上級生、下級生、全日本クラスの選手などさまざまな選手がいますが、どちら側にも偏らずに意思疎通を図ったり相手の意見を尊重して指導しているつもりです。

試合ともなればやはり勝つことがひとつの目標となりますので、選手の力量や技術が優先されますが、それまでのプロセスでは選手と一緒に取り組

みます。体育館の関係で練習時間が2時間くらいしか取れないときもありますので、メニューの工夫をしたり、体育館での練習後、体力UPのトレーニングを行ったりしますが、時間が短いせいかその密度は非常に濃いいいでしょう。練習中に気を抜く選手は独りもいませんし、スタッフも自分たちのやるべき持ち場をきちんとこなしています。

選手にはもともとその人に備わった能力がありますが、これとて平素の努力がなければ決して伸びませんし、能力と努力が重なると凄い力になります。逆に能力が多少低くても努力する選手については、それなりに評価して活躍の場を与えるようにしています。

—— 今回全国制覇したことで他のチームにチャレンジされる立場になりましたが、これからは強さを維持していくことも大変ですね。

今回の優勝はあまり嬉しいと感じていませんし結果に納得はしていません。たまたま決勝の青山学院大戦だけは快勝でしたが、それまでの勝ち上がりではミスも多く全くだめでしたので大いに不満なのです。もっと引き締めてさらに努力すればまだまだ強くなれるはずですし、上を向いて更に強いチームを目指すための課題は山積しています。また、選手たちはその要素を持っていますので、これからが本当の意味での勝負ですね。

—— 陸川さんは選手だった頃技術的にも優れた努力の人という印象でしたが、指導者になって感じることはなんでしょうか？

今考えると選手のとの方が楽でしたね。どちらかといえば自分を磨くことに専念すればよかったですから。指導者は技術を教えるだけでなく、選手のこと、チームのこと、練習のこと、取り巻く環境整

備からリクルートまでやらなければならないなど活動範囲は広いですね。お陰さまで自分自身、人間が磨かれるという良い職業についたなと感じています。

—— 逆に選手について感じることはありますか？

私たちが現役の頃は人の上下関係が厳しくしつけられましたが、最近の選手たちは上下関係がなく非常に仲がいいですね。上級生、下級生の隔たりが殆どないにも拘わらず、それぞれがやらなければならない役割分担はきちんとこなしています。

あとバスケットに取り組む姿勢が真面目です。外側からの見た目は生意気そうに見えるときもあるかも知れませんが、バスケットに取り組む姿勢は真剣そのものです。たまたま全日本に出ている選手はパブリセヴィッチ・ヘッドコーチに厳しくしつけられているせいか、練習に対する集中度などその厳しさが自然と身についてきています。あとは選手同士がそれぞれのいいところを自主的に学び取ってくれるのではないかと思います。私は学生たちの自主性は尊重しますので、ディスカッションも対等に上下の隔てなく行うようにしています。学生たちの意見を聞くことによってコミュニケーションも良くなりますし、それまで自分が気づかなかった点の指摘があったりして、それらが私の判断材料として役に立つ場合もあります。

—— この夏日本で男子の世界選手権大会が開催されますが、日本代表チームは決勝ラウンドに勝ち残れると思われませんか？

日本代表チームについてはパブリセヴィッチ・ヘッドコーチが厳しく鍛えていますので、大いに期待したいですね。しかしながら予選リーグを勝ち抜いて、さいたまアリーナで行われるファイナルラウンドに進出することは大変だと思います。世界選手

権に出場してくるチームはどこも凄い技術とパワーを持っていますからね。

実は私も日本協会の主催で行われている、大学生、高校生のレベルアップのためのスプリングキャンプに、指導のお手伝いをしながら参加させていただきました。竹内兄弟を中心として、石崎、菊池、内海、酒井、井上、太田などといった今までになく大型で非常にいい選手がそろっているという感じです。過去、後藤正規選手が全盛だった頃、国際的に日本男子チームが台頭していた時期がありましたが、それに匹敵するかそれ以上の素晴らしい素材が多くそろっていて、将来強いチームができるなと感じました。

学生も含めてこうした選手たちが今後の日本チームを支える存在になるのではないかと思いますし、これから日本の中心選手になってやってくれると思いますので、そのときが日本にとって国際的に飛躍するチャンスだと思います。彼らが出場したアジアジュニア大会をみても得失点差で決勝には進めなかったのですが、優勝した中国には勝利していますので、この経験は相当な財産だと思います。

—— そうすると今年の世界選手権よりもその先の北京オリンピックの方が可能性ありということでしょうか？

今はなんとも予測しがたいですが、日本代表としては若手に加えて、たとえば松下の青野選手といったようなベテラン選手もミックスした方がより強くなるのではないのでしょうか。

自分のところの選手を例に出して恐縮ですが、たとえば石崎などは187cmのポイントガードで、もっと経験させれば国際的にも通用するガードになると思います。私も以前強化について意見を述べさせてもらったことがありましたが、国内での強化だけでなくもっと多く外国と対戦できるよう、いわゆる武者修行に出かけるべきだと考えます。ヨーロッパでもアメリカでもいいですから出かけて行っ

て、その厳しい環境下で生活しながら試合を重ねる、特に大型選手は肉体的にも精神的にもタフになることが必要だと思います。

—— 日本を代表する選手が若返りつつある昨今、コーチ陣についても徐々に若返っていったほうが良いのではないかと思います。陸川さんのほかにも一昔前日本リーグで活躍した選手で、小野さん、池内さん、鈴木さん、瀬戸さんなどあちこちで指導者として頑張っておられる姿を見て、将来、是非とも日本代表のコーチになっていただきたいと思っておりますがいかがでしょうか？

そういう意味では小野秀二さんあたりがヘッドとして適任ではないかと思います。どなたかがヘッドをやってそれに周りのコーチたちがサポートするというシステムが良いと思います。また外国人のコーチングも大切ですのでアドバイザーコーチとしてお願いしたら良いのではないかと思います。

ただし船頭が多い陣容になるとスムーズにいかないこともありますので、トップは1名でその考え方に沿う形で協力する体制を作ることが大事だと思います。また、選手の選考や強化策については強化委員会などで意見を出し合うことも賛成です。いずれにしても皆が一致団結して強化に取り組むことが必要でしょう。

日本のバスケット界も時世に合わせて変わる時期にきているのではないのでしょうか。今の学生たちのバスケットに対する考え方も、私たちが現役だった頃に比べれば変わってきています。

今回インカレで優勝したことによって、若い人たちの意見も取り入れながらまた勉強しなければならない良い機会を与えていただいたと思っています。

—— いずれにしても日本のバスケットがもっと発展するには、国際的に強くなって世間の注目を集めるようにならなければと考えます。

国際的に強くなってオリンピックに常時出場するようになれば、マスメディアももっとこちらを向いてくれるでしょうし、良い方向に向くと思います。

陸川さんのように斬新な考えの方々に頑張っていて、日本バスケットの強化発展に力を貸していただきたいと思います。本日は有難うございました。

東海大学バスケットボール部（男子）

久保正秋部長、陸川ヘッドコーチのほかスタッフは、コーチ2名、学生コーチ5名、コンディショニングコーチ5名、トレーナー1名、メンタルトレーニングコーチ1名、マネージャー8名。選手はAチーム21名、Bチーム27名。

神奈川県平塚市にキャンパス、体育館があり体育館はバスケットコート4面の広さ。チーム名にシーガルズ（かもめ）という名前をつけて、地域密着型の大学チームを目指している。

JBLに比べて注目度、人気が高い大学バスケットの活性化を図り、人気上昇、集客率増加を目標としてさまざまな活動をしている。ホームページによるチーム紹介や中学生、高校生を対象としたクリニックへの積極的な参加、地元にいる若いバスケットボールプレイヤーとの交流など。将来は地元テレビ局による試合の放映も企画中。

ホームページURL

<http://www.tokai-seagulls.com/>